

全盲で半身まひの利用者が便座から転落して重症

—トイレの設備は古いままで良いか？—

■ 視覚障害者は便座上で不安定

58歳の女性利用者Kさんは、全盲で昨年患った脳梗塞の影響で、左半身に軽い麻痺があります。ある時、Kさんは自分でトイレに行きましたが、便座から転落してしまいました。右側に手すりがありつかまっていたのですが、左側にバランスを崩した時に手を放してしまったようです。Kさんは左前に勢いよく転落したため、頭部を強打し発見された時には意識は無く救急搬送されました。Kさんは外傷性くも膜下出血で重症となりました。



施設では「Kさんは排泄は介助不要で自立であり、便座からの転落は防ぎようがない」と家族に説明し、家族も事故直後は納得しました。ところが、その後「最近の福祉施設のトイレには色々な設備が付いていて転落事故が防げるトイレも多い。なぜ転落防止の設備を設置しなかったのか？」と問われました。しかし、開所22年の施設での設備の改修にはなかなか手が回らないのが現状です。

身体に障がいのある利用者のトイレ

■ 古い設備は必ず陳腐化リスクが生まれる

開所から長い年月が経過するような施設では、トイレや浴室の設備なども開設当初からの古い設備であることが当たり前のように思われています。しかし、設備などの製品は年月の経過と共に改良され、その機能が改良され進歩しています。多くは「使い勝手が良くなる」など使用の利便性が改良されますが、製品の安全機能が改良されて、安全性も進歩して行くのです。

つまり、10年前の製品の安全性はその当時は普通であっても、今の新製品と比べると安全性が相対的に低くなるのです。年月の経過に伴い安全性が進歩することで起こる、古い製品の危険を“陳腐化リスク”と言います。Kさん事故のケースでも家族の言う通り、便座からの転落のリスクが想定される以上は、重大事故のリスクを軽減できるようなトイレの構造が不可欠ということになるのです。

■ 重大事故につながる設備は早めに改修する

では、古くて危険な設備は何年に一度くらい、新しいものにリニューアルすれば良いのでしょうか？色々な目安があります。例えば、他の施設に比べて見劣りがするようであれば、ぼちぼち改修の時期と考えた方が良いでしょう。また、家族の意見も重要です。最近では公共施設や駅の多目的トイレが、見違えるように設備が充実してきました。家族の中には、「なぜ福祉施設の設備はこんなに古いのだろう」と感じる人もたくさんいるからです。「トイレからの転落は防止できなくても、重大事故につながったのは施設の設備のせいだ」と主張されると法的な責任を問われる可能性もあります。

そのため、福祉施設では5年に一度くらいは、福祉用具とトイレや浴室などの設備が最新の設備と比べて大きく安全性が劣っていないか、点検する必要があります。歴史の古い施設が多いことから、障がい者施設は特に設備の陳腐化リスクが散見されます。事故が起きた時、その環境要因に関わる用具や設備なども、利用者・家族の目線でチェックしてみることも大切な事故対応のポイントです。右のように後から設置できる安全装置がたくさん発売されていますので、本格的な改修が難しい場合でも、出来ることを検討してみたいかが良いでしょう。



発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
マーケット開発部市場開発室
担当：堀江・窪田 TEL 03-5789-6456

担当課・支社 代理店